

「<沖縄的状况>で子どもを産み育てること——沖縄の非婚シングルマザーの生活史インタビュー調査から」

○平安名萌恵（立命館大学・院）

【研究背景・問題点】 沖縄県は、非婚シングルマザーの割合が高いことで注目を集めてきた。これまでの先行研究においては、沖縄の非婚シングルマザーの高い割合は、おおらかで地縁・血縁ネットワークに基づく相互扶助的な沖縄の共同体の特徴に基づくと考えられている。しかし、近年の沖縄を対象とした生活史調査では、共同体から排除される者がいることも明らかにされており、既存の共同体像への問い直しが求められている。また、実際に沖縄では母子世帯の貧困が社会問題となっており、共同体の存在を理由に非婚シングルマザーの生活を楽観視することには疑問が残る。共同体への過度の期待は、沖縄の非婚シングルマザーたちが実際に抱える困難だけでなく、非婚で子どもを育てることをめぐる彼女たちの主体性を看過する恐れもある。以上の問題を解決するために、まずは共同体というカテゴリーにとらわれることなく、沖縄の非婚シングルマザーの個人的な経験の語りから微細な人間関係をとらえ、彼女たちが具体的に誰から実際にどのような支援を受けているのか（受けていないのか）を実証的に明らかにする必要がある。また、彼女たちが子どもを産み育てる意思決定をする際に、パートナー、親、親族、友人など、周囲をどのように捉えているのかについても明らかにする必要がある。

【目的・方法】 本研究では、生活史のインタビュー調査という手法を用いて、沖縄の非婚シングルマザーがどのように周囲と関係性をもちながら子どもを産み育てる意思決定をしたのか明らかにすることを目的とした。発表者は、2018年8月から2019年3月にかけて沖縄県本島在住の非婚シングルマザーを中心に生活史の半構造化インタビューを実施した。分析には、生まれ育った市町村と同じ地域に居住している非婚シングルマザー6人の調査データを中心に用いた。調査対象者の女性は、10代から30代後半に非婚で出産を経験し、ほとんどが中卒から高卒といういわゆる低学歴である。職業は事務や経理事務が多く、月収は10万円未満の低所得者層も含まれていた。

【研究結果】 申請者の生活史インタビュー調査から、確かに女性たちの中には家族や親族、近隣住民などから支援を受けた経験を持つ者がいることが確認された。しかしながら、「ひとりで生きている」「家族は何もしてくれない」などと孤立した生活をしていると語る女性や、育児がうまくいかないこと等について周りから心ない言葉で傷つけられたと語る女性なども多く、親、親族など周囲からのサポートは場当たりので十分なものではないことが明らかになった。また、調査対象者たちは、出産に限らずさまざまなライフイベントにおいて、特に親や親族から「好きなようにすればよいが、期待もするな」という、排除というよりは放任的な対応をされていることが示された。

貧困層の女性の出産の選択は、出産によってさらなる貧困・困難に陥らせるものであり、出産の選択自体が問題とされる。しかし、調査対象者の女性たちは、妊娠・出産において「確固たるつながりが欲しい」などと、子どもとの関係それ自体に強い存在意義を見出し、出産を決めていた。非婚シングルマザーになったこと自体は偶発的であったが、妊娠・出産については家族を得るというポジティブなライフイベントとして捉え、自分と子どもにとって最善の選択肢を常に考え、出産・養育しようとしていることが明らかになった。

キーワード 非婚シングルマザー 沖縄